

今、ラジオを聞きながら描いていた、ふと面白い言いまわしに手が止まった。「絵の中に閉じ込める」ラジオを聴きながらの、ながら族なので前後の話の脈絡、「何をどう閉じ込める」のかは聞き洩らしたが、「面白いフレーズだ」とその言葉だけが頭の中に残った。

「オレの絵は オレを おまえを きみを 絵の中に閉じ込めている のか」と再発見した、とっさに、これはいい言葉だねと思った。とりとめもなく流れている時間、どこまで泳げるのかわからない空間、そんな時間空間を吹っ飛ばして、「オレを・おまえを・きみを、小さい絵の画面の中に閉じ込める これがオレの絵なのか オレのやりかたなのか」とわかったようなわからないような発見にその時は、盛り上がった。

今、また、安威川の河原を走りながら考えた。封じ込める、閉じ込める、塗りこめる、こんな言葉を使うと、なんだか悪魔的、妖怪的、呪術の世界にはまり込んでしまいそうだ。生きているもの、命あるもの、形あるものを、どこかの一点、ピンポイントに隠してしまう、これはよくない。昔どこかのお姫様が形を変えさせられ、森の木か岩に、封じ込められた。それを聞いた王子様が、ならば助けようと白馬に乗ってやってきて、矢を射ればたちどころに姫は元の姿に戻り、二人はめでたく結ばれた。なんて夢のようなおとぎ話はさておき、やはりアミニズムのにおいがプンプンする。閉じ込めるのが、絵の中であり、木の中であり、岩の中であり、現代風に探すならば、宇宙空間であったり、電気や光の中であったり。

「オレの絵は そこにある 欲しいもの を取り込んで 描き込んでしまう」これでいかがかな。どうも逡巡していると、歯切れが悪く、勢いがなくなり、最初に聞いたインパクトが薄れ、徐々に常識的なみあいになってしまう。そこにある、実態であり、存在であり、空気であり、そんなものを、一瞬の時、ワンポイントの空間を、画面に描き込む、それが絵だなんて、ますます、だらだらしてくる。いつもいうように、「想いうかんだことをさっと 描け」という自身の自信のセリフから、次から次に雑念が入り、よくないものになっていってはいけない。アートというものはそういう矛盾だらけの分野なのである。

今、安威川河原に来ている、いつもの場所、ここでストレッチ体操をする。ストレッチ体操をし始めてまだ5年は経っていないかな、簡単な体操は休憩ついでにしていたが、20分30分はしていなかった。まず少し飛び上がり、と簡単に言うけれど、歳なのか飛び上がれない。アフリカのマサイ族の若者が、槍を持った民族衣装で、ピョンピョン飛ぶさまはすごい、50.60センチは跳ね上がっているのでは。それに比べオレのぴよんぴよんは、せいぜい10.20センチしか上にあがっていない。地面に尻をつけ両足を開いてみる。これは全く苦手なポーズだったが、最近少しは慣れてきて、直角ぐらいには足が開く、身体を前へ右へ左へ倒してみる。簡単な腕立て臥せをして、腕を伸ばし胸をそらせ、深呼吸、これは気持ちがいい。次いで四股を踏み、前に倒れ背を伸ばし、右足左足を伸ばし腰を落とす。

この何日か、蒸し暑さがぶり返し、昼のアトリエは33度34度とぐったりするほど暑い。今日は午前中、ぼたりに床に伏せしばらく昼寝をしていた。夕方5時の今、陽が短くなりはじめ、もう1時間もすると日没という雰囲気だ。台風が来ているという、二三日先に関西に一番近づくといい、週末に、西穂高方面を予定しているが、順延になるかもしれない。先週も勝山の赤兎山を予定していたが雨で中止した。70.80%の降水確率だったが、当日現地の天気を調べると、雨は全くなかったとか。台風進路も、その時にしかわからないということもある。

空がきれいだ。青い空に白い雲が、まだらまだらに並んでいる。暗い雲が空の下のほうにあり、これは雨雲だとわかるがこらあたりは降りそうもない。まだらまだらに並んでいるその間の青い空は、永遠を感じさせる遠い青、その透明な向こうに何があるやら、あそこらあたりには人が行ける時代だ。

◎新穂高温泉の登山者用駐車場、8月の槍同様、またまた満車となっていたが、何とか一台分のスペースを見つけて駐車した。土曜日は人で混むということを忘れていた。西穂山荘でもテント場がぎりぎりの隙間を思い知らされた。天気予報では、土・日は晴れ、月曜は雨模様だという、「ならば土曜日に出発」と決めた。

◎朝7時に茨木ICを出発。相澤・前川・上西・岡村のメンバー。12:30に新穂高温泉の登山者用駐車場に着き、車を止め、駐車場の河原で弁当を広げて腹ごしらえ、慌てて、車の運転席に雨具の上着を置き忘れた。

◎荷を担ぎ、登山届を出し、ロープウェイに乗った。往復2900円、荷代600円、計3500円也。こいつのありがたさは、2150Mまで1000Mを一挙に上げてくれる。18キロの荷、西穂山荘まで、1時間半200Mの登りだ。

◎2:00歩き始めた。大阪はまだまだ暑く、半そで一枚で過ごしていたが、2000Mを超えるここは、長そでシャツを着て歩いているが、ヒヤリ冷気を感じる。紅葉がさほどではないのにはいささかがっかりである。

◎テント・シラフを担いでの登り、一時間半のコースタイム、2時間ぐらいのなら荷を担げる。槍平の4時間はきつかった。最近では長時間の登りになると、バテがやってくるようで情けない限りである。

◎テント場にやってきた。「なんと ぎっしり詰まっている 隙間がない こんなに狭かったのか」と思い知らされた。何とか隙間を見つけテントを張った。「テントが無理なら 小屋は泊まります」と受付嬢。冬にも何度かテントを張っているが、だだっ広い雪の広場だと思っていた。雪のない今、小さい区画が仕切っており、このテント場が、こんなに小さいとは思わなかった。最近では仲間と来ても、ひとりテントが多いそうだ。

◎「テントを張って 1時間ほど上に行こう 散歩をしよう」と思っていたが、「ええい 今日は 飯を食って寝るしかない」と決めた。小屋の中も人だらけ、こんなに人の多い山も久しぶりだ。若いころは仕事があり休日しか出かけられなかったが、「ジジババは 土・日・祭日を利用してはいけない」としみじみ悟った。

◎晩飯は、乾燥野菜に生の肉の鍋、これはなかなかのものである。いつもの山は普通の野菜を使って作っていただくが、なんら遜色ない、むしろ味が濃く美味い。キノコ・アゲ・青物と多種多様。小屋でビールを買い、持参のウイスキーをちびり、隣のテントの会話がまる聞こえ、7時にはシーンとしはじめ我々も寝た。

◎明日は全員で上高地に下ろうと予定していたが、「我々は 独標に行きたい」と言われるので、ならば、「焼岳に変更しようか」ということになった。相・前チームは独標へ、岡・上チームは焼岳へ。

◎7時出発。雲がひとつだけあるという青空。朝は昨日の鍋にアルファ一米を入れたおじやを食った。

◎目的の焼岳が小さく見える、その向こうに乗鞍岳がでっかく見える、上高地の向こうに霞沢岳が大きく見える。冷たい風がひやりと流れる。雨具の上着を車の中に忘れてきた、「えらいことをした 大丈夫かな 大失敗だ」とひやひやものである。雲海が見える、小さい鳥が木の間を飛んでいる、尾根道だと思っていたがどんどん下る。

◎10分ぐらい下ったところに、左上高地-3.5K、右焼岳-4.5Kの分岐点がある。思い出すのは50歳ぐらいのころ、このあたりで山下さんを救出した。2月の雪の中、「西穂の小屋で会おう」澤山・岡村は今回と同じコースで小屋に居た。夕方になり暗くなり、おかしいねえ、来ないねえ、心配しはじめ、外に出てみるが、3.4M積もった真っ暗な雪の中、探しようがない。電話をすると松本を出ているという。「ベテランの彼が・・・」と朝一番に装備をつけて大声を出しながら下って行った。多分この分岐のあたりだと思うのだが、声がした。テントがあり、青白い顔をした山下さんが呆然と立っていた。早速湯を沸かし茶を飲ませた。「上高地は庭だよ 写真を撮ったりして3時間で登れる ゆっくりしていた」「雪に足を取られて進まない だんだん暗くなってくる ザックをデポして 空身ならいけるだろうと歩いた」「なんとテントの灯が見えた 助けてくれ 中に入れてもらった」「テントの中 寒くてさむくて 朝まで眠れなかった」という顛末で、我々はみんなで小屋まで戻り山下さんは生気を取り戻した。長谷川さんのテントがなければ、山下さんは固まっての発見となっていただろう。

◎「火山域」という看板。焼岳は噴煙が昇る活火山、北海道の雌阿寒岳でも同じようなことが書かれていた。御岳山も突然の噴火でたくさんの方が亡くなった。火山噴火は予知できないそうで、焼岳もいつ爆発するかはわからない。気をつけて登ろう、とはいえ気をつけようにも、つけようがないが・・・。

◎30分ぐらい下ったところで平らになり、池がある。「ここから登り返していくのかな 尾根道になるのかな」と気軽に思っていたが、まだまだ、下っていくことはこの時は知らなかった。焼岳小屋が2082Mなので、だらだら300Mぐらい下っていく。ロープウェイの駅より低いということだ。

◎「おいしいよ」と黒い実、赤い実をいただいた。ナツハゼともう一つは何だったか、酸っぱくて美味い。

◎猿の腰掛が連なったようなキノコ、マスタケというらしい。食えるそうだが、外国では毒だという。

◎ポツリと来た、雨具の上着を車に忘れてくるという大失態、「天の神さま どうぞ 降らないように」と祈るばかりと苦笑。道はますます下る、下るぶん森の緑は深くなる、大きな針葉樹が立ち並び、笹が草が生い茂り、地面はしっとり湿っている。北アルプスの尾根道とは思えない茂みの中、空気が美味い。

◎看板がある。「この先 火口域から2キロ圏内」火山活動はいまだに活発で、微細な振動が常時あるようだ。大正時代の噴火の写真を見た。奥飛騨温泉あたりからの写真では、焼岳の姿の3倍ぐらいの爆発が写っている。先日の御嶽山どころの規模ではない。今回北峰2393Mに登ったが、南峰2455Mは入山禁止になっている。

◎焼岳小屋までやってきた、小さな小屋だけれど10人ぐらいの人がいた。秋の日曜日、焼岳は上高地から3時間、平尾温泉側、合掌の森中尾キャンプ場から5時間で登れるようだ。西穂からは人が少なかった。

◎焼岳小屋から頂上に向かって歩き出した。ひとつのピークあたりに苔がいっぱい、緑のいつも見ている苔ではなく、ちょっと白っぽい苔が斜面一面に、ほんわかぽこりんと貼りついているさまは素晴らしい。

◎ごつごつした岩の山、石ごろごろの間に土がある、硫黄臭、煙が上がる、いよいよ火山の山、どんどん登る。

◎まだ上がある、まだ岩稜が続く、小屋から2時間近くかかってしまった、ふうふう言いながらやとてっぺんにやってきた。なんと爆裂の山、火口の下には大きな池がある、二十三人がいる。樹林帯では雨が降りそうな天気だったが、ここは晴れ、雲が霞がたなびく、南峰のごつごつピークが見える、乗鞍が見える、霞沢岳が見える、後ろの穂高が見える、下に目をやると、奥飛騨温泉郷、上高地が見える。

◎雌阿寒岳では二回とも視界不良で、火口が全く見られなかったが、今ここは爆裂火口が目の前にある、よくまあこんな大きな穴を空けたものだとあらためて爆発の力を思い知る。黄・赤・黒さまざまな地獄の様相である。

◎12:20 降りをはじめ。岩ごろごろをゆっくり降りる。イギリスのロンドンだよという若者たちもいた。

◎往復の行程なので、焼岳小屋から西穂山荘に向かって歩いている。コースタイムは復路のほうが30分余計にかかるという登りが多い道だ。朝のパラリがそのまま降ったのか、水滴が葉につき、下の泥もぐちゃりとしている。シカの足跡が登山道に続いている。この辺りはまっすぐ伸びた針葉樹林帯、2000Mを超えたあたりだけれど樹の名前はわからない。腰のあたりまで笹が伸び、まさに森林浴のまっただなかだ。

◎この道沿いに池が三か所あった。もっとあるのかもしれないが、地図には、「きぬがさの池」だけが命名されている。ダテカンバの樹だという、ほれぼれするレモンイエローの黄葉だ。〈一般的には紅葉でいいらしい〉

◎上高地との分岐点まで帰ってきた。あともう少し、えっちら登りである。またもや山下さんを思い出した。

◎往復で10時間歩いたことになる。「私達は 独標まで登れた ほとんど雲の中 景色は見えなかった 素晴らしかった」と言われる。「なかなか帰ってこないの心配していた 8時間で行く人もいるらしい」そう言われ、焼岳の登りに時間がかかったかなと反省。森林浴の尾根道、ごつごつ岩の爆裂の山、これまた最高である。

◎小屋のビールをいただき、アルフー米にレトルトカレー。昨日に比べテント場は閑散としている。天候も予定通りに下り坂だという。気温も下がってきたのか肌寒い、ダウンを着こんだ。

◎8時ころには寝てしまった。簡易テントで一人寝たが、昨日に比べいささか寒い、寒いと思いながらも眠気が勝ち、朝6時ころまで寝ていた。朝、ひとりで水・パン・カメラをもって上に登り始めた。まだ寝ぼけているのか急な登りがつらいなと思いつつ歩いていると、もう丸山という標識が出てきた。ここは冬に何回もやってきた、「ちょっと散歩 このあたりで帰ろうか」澤山さんの声が聞こえる。雪が凍ってアイゼンががちがちだった。

◎山荘のあたりは積雪が3Mぐらいになるのか、標識がえらい高い樹の幹に釣ってある。

◎平湯バスセンターで風呂と思ったら廃業していた。隣で風呂、高速のSAで昼飯、6時ころに帰り着いた。

◎吉本隆明著<良寛>読み始めて、「おお 今までわからなかったこと 不思議だったこと」これらのいくつか、目からうろこ状態になった。良寛は、なんで修行が終わって乞食になったのか。なんで禅僧をやめて自由僧、自由人になったのか。なんで故郷に帰ったのか。なんで一人で生きたのか、わかったことわからないことがまだまだ続く。

◎良寛自身がじぶんの青小年時代時代を述懐した詩を見ますと、朝には黄色いぴらぴらした衣装を着て、白い鼻づらの馬に跨って遊びにでかけ、お酒を買って飲む。夕暮れには花見にいたり、何不自由なく暮らしていた。帰っていくところはどこかといえば娼婦の家、そういう生活を送っていたと書かれています。

◎良寛が道元に傾倒していたことがわかります。「永平録を読む」では、道元の、「正法眼蔵」を読んで、感涙の涙で本を濡らしてしまった。翌日人が来て、「この本はどうして濡れているのだ」と問われ、「雨漏りで」と。

◎正法眼蔵は、道元は：道元の正統意識、「われこそ 仏教の正統なり」釈迦に始まり、中国に渡った仏教の正統性を継いでいるのは自分だという自負という偏狭さ。当時の中国は（宋時代）仏教禅によく似た老荘思想と融合した禅の中国化の風潮にあった。道元の留学した天童山はきびしく仏教禅の正統性を守っていた。「老荘と融合してしまった禅はだめ 本質を保持しているのは天童山 道元自身である 正法眼蔵である」

◎老荘思想は人間の永生という観念はなく、現世にあるときは天地と合一する無為の生き方がいいとする。

◎仏教禅は生前の命、死後の命、永続的に続く命について、根本的な解決の仕方をもたらしている。

◎仏教以前のインド思想は、靈魂や精神が、形ある肉体に宿りそこから出て、また次の形に宿り生命は永続する。

◎良寛は道元の絶対的な声調と、絶対的な正統意識にひかれた。備中玉島の円通寺へ、国仙師から印可をゆるされた。曹洞宗の正統な師家に印可を許されたのだから俗才があれば、曹洞宗の衣鉢を継いで宗派を束ねることをめざしたかもしれない。道元は正法眼蔵の中で、詩文などに淫するのは、また老荘思想に淫するのは、墮落だとしりぞけていますが、良寛は詩文と老荘に淫していったとっていい。

◎先生、「寝覚めの友」を書いておられる。近藤万丈が若いころ土佐を旅した折、雨に降られ、目の前の小屋に雨宿りをたのんだ。小屋の主の坊主は口もきかずただ微笑むだけで、座禅するでなく、眠るでなく、念仏もない、狂人では・・と書いています。翌日も降りやまず二人で炉端で寝ころんだ。蕎麦がきを馳走してくれた。小屋には木仏がひとつ、机には唐刻の荘子があり、字が書いてありそのうまいのに感心した。帰りがけに扇子に揮毫を頼むと、絵と字を書き、「越州の産了寛書ス」とある。

◎良寛の性格悲劇を包んでいる思想の雰囲気は、老荘の優れた自然思想、制度から退くこと、道徳から離脱することでした。天地山川は、何もしないのにそのまま清らかで安穩であるところに、老荘は無為の良さを位置づけました。「仁義が生まれると かえって天下が 惑乱する」と説きます。「生は天地からゆだねられたものであり死は天然という巨室に眠ることだ」と荘子は言う。良寛は制度以前の思想に生きたのです。

◎荘子や老子は制度や道徳に対する考慮から自由であり、むしろ無化される根拠を提示します

◎孔子には制度に対する考察が道徳に対する考察と一緒に二重に含まれます。

◎良寛は、道元禅を放棄し、荘子に後半生の支えを求め、荘子の無為に解放され、風光に対する情念を燃やした。

◎吉本隆明著<良寛>先生は、良寛の和歌より長歌・漢詩のほうがいい、良寛がよくわかるとおっしゃる。オレは日本の古代、男女が、男女だけでもないが、和歌でのやり取り、これでまず微細なニュアンス（仏：微細な陰影濃淡）が伝わるものだといふかっている。彼らが、話を極抽象的に、「伝わらなくてもいい 音の流れで表現したかった」というのならそれは素晴らしいことだが、短い音を聞き、「ええい これを このことを わかってくれ」とはがゆい思いをしたことが多かったのではと推察するのは低劣なことかな。先生と水上勉との会話も面白い。先生の「書」の話はいただけない。絵や書の話になると、どちらかの脳がフリーズするのかな。

◎道元：正法眼蔵で、仏教の根本義である不生不滅について、「人間は生きている間は生きている 死ねば死んでいる」「生が死に移り変わる 死が生に移り変わる ということはない それぞれに満たされている」「すべての事物はそれ自体で満たされている」「鳥の外に空があるのではなく 鳥が飛んでいる状態に空が含まれる」「魚が泳ぐとき 水はそこに含まれる」「人は 考える心 感じる心の中に 山河天地 日月星辰が含まれる」「行仏とは 修行して近づくのではなく 修行自体が仏なのだ」

◎同時代の親鸞は、「人間は 生きているとか 死んでいるとか その人がその人であるというところで 人間は本質的な存在ではない」「現代的に言えば 人間はいつも 現に存在するところのものではない」「存在するものは すべて仮の姿で 本質的な人間とは それらを貫いている なにかだ」「親鸞にとって浄土とは 死んだ後で行くところではなく 生きている状態を見通せる目を獲得できるとすれば それが浄土の始原だとみなしている」

◎良寛は師の国仙が死に円通寺を出た時、「道元の行仏」を捨て、「道元の阿羅漢」の思想に傾いたのでは。「行仏」が曹洞宗の根本的な思想、座禅を組み、修行をする、そのことによって自身が仏を具現する。道元の、「阿羅漢」とは、利益や名利を求めず、人を教化しようとか、役立とうとかを捨て、ひたすら無頓着に自然の中にあり、自分の心と同じものとして受容する。良寛は阿羅漢の道を選び、郷里をめざしたのでは。

◎先生は、僧として生きる、僧侶の位置、僧侶とはなにかと話は進む。良寛が僧としていかに振る舞ったか、自分をどう位置付けたか、という話をされる。古代インドも中国も遅れて日本も、アジア的社会は農業の村落共同体を核に形成された。僧侶とは何かを問うのは、農業の村落共同体に対してどう自分を位置付けているかを見るのがよろしい。<この話は、まっとうに聞こえるが、さて良寛は何と答えるやら。>

◎良寛の、「勸受食文」では、僧侶が托鉢での乞食の話。仏道は法において平等だから、乞うのは金持ちからとか貧者からとか分けてはいけない。食を薬と考え、空腹を満たすのではなく、身体を養生する必要最小限を乞うて食べるべきだという。

◎僧侶の中には、頭ぼうぼう、衣ボロボロ、きびしい修行者然として、五穀を断つ者がいる。草や木の根だけを食べ、炎天の下で座りとおす修行者がいる。良寛はそういうのは仏道者ではないという。強烈な修練は誰にも見られることなく、勝手に死ねということです。

◎水上勉：農民の次男三男が百姓を脱化してたどり着くのが寺の庫裏。円通寺にいた仙佳に良寛はいたく感動している。寺男の仕事は薪づくりと飯炊きです。相国寺の老師、大拙は貧農の子で、寺男として修行していた。インテリが右往左往する中で、「ああありがたい」「めしがくえる」という姿が禅境の高みに届くのでは。良寛は狭い五合庵で六十のジジイが、「袷がどうした インキンタムシの薬がどうした」健康に注意しながら必死に生きた。そんな人に、物を持って来る無名の男たちの行列が私には見えるのです。

◎吉本隆明著<良寛>

冬夜（とうや）長し  
冬夜長し冬夜長し  
冬夜悠々何時か明けん  
燈（ともしび）に焰（ほのお）なく炉に炭なし  
只（ただ）聞く枕上（ちんじょう）夜雨の声

◎吉本先生のぼやき：この詩は冬の孤独な隠遁者の生活の心境を述べているのだと解しないほうがいい。自分の意志で自ら選んだ山中の、誰もいない孤独な生活の中で、冬の夜寒くて火も消えちゃった、炉端に炭もなくなった、そういう時、なぜ自分はこういうことをせんなんのだ、こんなことをして何になるんだ、誰もそれを認めてくれるわけでもなし、誰のためにやっているわけじゃないし、こんなことをしたからって、別にどうとことはない、つまり一番よくいって、じぶんがひとりでに死んじゃうということだけですから・・・。

檻樓又檻樓

檻樓これ生涯

食は裁（わずか）に路辺に取り  
家は実に蒿莢（こうらい-よもぎ）に委ぬ  
月を看て終夜嘯き（うそぶき）  
花に迷うて言（ここ）に帰らず  
一たび保社を出でしより <ひとたび道元の宗派を抜けてから>  
錯って（あやまって）箇の驚駘（どたい）と為る <愚か者になってしまった>

◎オレが好きな詩 吉本先生が何といおうと、素直でいい詩じゃないですか。

この夜らの いつか明けなむ  
この夜らの 明けはなれなば  
をみな来て 尿をあらはむ  
こいまろび 明かしかねけり  
ながきこの夜を

◎夜が明けたら、尿の垂れ流しを洗ってくれる女性がやってくる。

一路万木の裡（うち） <木立の間に道が一本>

千山杳靄（ようあい-深いもや）の間

秋に先んじて葉まさに落ち

雨ふらずして岩常に暗し <雨が降らないのに岩陰はいつもくらい>

籠を持して木耳（もくじ-きくらげ）を取り

瓶を携えて石泉（せきせん-石清水）を汲む

迷路の子に非（あらざ）るよりは <人里外れた山の中では 迷い子でもなければ人は来ない>

能く（よく）この間に到るなけん

◎先生：良寛の日常の一コマ。自然とのかかわりを普通に楽しんでいる。

◎9:45 登り始めた、いきなりの急登、は一は一だ。「比良の武奈ヶ岳は 登ったことが ないので」「へええ」「台風一過 天気もよさそうだし」「誰かを誘おう」ということで話は決まった。ただ天気が良くない、晴れマークが突然、傘マークに変わっている、これはなんだ、秋の季節に入ってどうも天気に左右されっぱなしの最近、安定しない空模様が続いている。かといって先日も、「雨だから中止」なんて二三日前に決めてしまったが、その当日になってみると、「晴れている いい天気じゃないか しまったことをしてしまったね」ということの二度もあった。

◎前の日の夜に、「孫が 熱を出した めんどくみなければ ゴメン 欠席します」と美智子さんから。かつてのマラソンランナーも孫には勝てない、四人で行く計画が山田さんと二人になってしまった。

◎湖西方面、車で行く場合、茨木から京都東まで高速道路を使い、無料になったが自動車専用道路である湖西道路を使う。この湖西道路、日時によっては渋滞になり進まないが、朽木方面・小浜方面・北陸方面には便利に使わせてもらっている。今回は坊村から武奈ヶ岳に登るコースに決め、「山田さん 京都南付近の竹田駅まで きてください」というと、「今出川あたりで ひらって」という。まずこれには驚いた。「京都市内に車で・・・」というのは、「京都は 道路が混む」「高速道路がないので 地道しかないの スイスイ走れない・・・」

◎烏丸今出川交差点ならわかる、そこが行きやすい。そう決めたが朝の京都市内は車が走れない、約束より15分ほど遅れたが歩道わきに立っている山田さんを発見してほっとした。「ここから 大原を超え 小浜街道に抜けます 大原あたりは 自転車圏内 下駄ばき自転車で 若いころは よくきましたよ」あの有名な、三千院やら、修学院離宮やらの看板がちらほら。彼は京都ではもっぱら下駄ばきおじさんだ。

◎車を走らせながら、大原あたりからぽつぽつ、それがだんだん本降りになってきた。「あちゃ～ これはいけない」坊村あたりでもざあざあ、「どうしよう ちょっと先の道の駅へでも行ってみましょう」山田さんの解析によると、雲の帯が関西のこのあたり、朽木あたりだけ流れていて、10時ころには切れる、10時から晴れるという。坊村に帰ってきたころにはまだ9時半だったけれど、雨がやんできた。「登りましょう」ということになった。

◎1時間ほど登ってきた。青々した葉っぱがあたり一面散らばっている。二日前に、ものすごく大きい台風が関東を横切って北に向かった。何日も前から超大型の台風と脅かされていたが関西を外れたことで、多少の雨が多少長い時間降ったぐらいですんだ。その台風の風が吹いたのか葉っぱが散っている、栗も落ちている。

◎「とりかぶと」この単語が出てこない、歩きながら一時間も出てこなかった。このように固有名詞が出てこない、あれやこれや頭の中で錯綜するが、ピタリしたところに行き当たらない、薄い脳の浮揚する時間だ。陽が出てきた、青空が出てきた、日本海側はまだまだどんよりの厚い雲、太平洋側は青空に白い雲という空模様になってきた。風は冷たい、耳が痛い、今日は、耳が隠れる帽子も手袋も持ってきてない。

◎12時過ぎに弁当を食べ、早々に退却。比良の紅葉はまだまだようだ。

◎行程の途中になだらかな谷筋のある場所、ここは森の中、樹々のトンネルの下、お気にいりの場所だ。照葉樹林が続き、獣道まで右往左往、雨が降れば真ん中の溝が水の流れに変わるのだろう。「熊かと思ったが 猪かな」「猿 群れだねえ」薄暗い森の中大いに深呼吸、「いいねえ」

◎山で話しながら、「御所の近所からは 小浜街道は近いけど 琵琶湖の 湖西や湖東は距離が遠い」という。土地勘のないオレにとって、目からうろこの話、帰って地図を見て、「大原付近は なるほど 近所だ」「大原を抜けると 途中の交差点がすぐに 出てくる」なるほどである。

◎昔、「話を聞かない男 地図の読めない女」というベストセラーの本があった。実は読んでいないのだが、オレは地図の読めない男かなとふと思った。若いころから、今でも、右へ曲がって、先のほうをまた曲がって、という風には覚えているが、地図という利器を頭に描いて、しかも北を上にして、現在地がここで、西に何歩南に曲がってまた何歩という風には自分を制御しない。脳の回路が女性的なのか、地図をじっくり見直して、今までの自分の頭の中の地図との隔たりを如実に知ることが多い。今回も大阪・京都・滋賀の三つの地図を眺めながら、「むむむ こういうことだったのか」と七十歳の手習いである。

アトリエに描きかけの絵がある、立てかけては見つめ、壁に吊っては眺め、思案しながら十日ほどの時間が過ぎた。大きさは50号の縦、「はしるはしる」をテーマにした絵だけれど、まず黒く塗ってその上に青や赤やの線を描き、また同じ絵の具で面を塗りつぶし、ぐいぐい描きこんでいるぶん、まとまってこない。そんなわけで次の手を考えながら十日も過ぎてしまった。

こういう困った状態に陥ってしまったときにはいろいろ手を考える。昨夜、30号の白いキャンバスを2枚引っぱりだし、それぞれの絵にたっぷりのおつゆ絵の具を画面半分ぐらいに塗り込んで寝た。朝起きると、それら、30号の絵の具は乾いている。まず飯を食ってアトリエに戻り、大きな筆にたっぷり絵の具をつけ、停滞している50号の画面の何か所かに塗り付け、こすりつけた。次いでその絵の具に少し違う色を混ぜて水っぽくし、画面に筆で直線や曲線を入れ込んだ。同じように昨夜の30号のそれぞれに、それぞれ違う色を、水っぽくして画面に筆で直線や曲線を入れ込んだ。そんな作業が1時間ぐらいで終わった。やっと描けたという気持ちと、まだなんだかぴんとこない、出来上がったというオーラが現れないとまずは筆をおいた。

絵具は、チューブから出したままでは、ねっとりとしている、粘度が高い。粘度が高い絵具をそのまま使うときには、平らなパレット、金属のパレットに絵の具を出し、金属のナイフで絵の具を混ぜ、そのまま画面に刷いたり、塗りつけたり、こすりつけたりする。アクリル絵の具ではなるべくジェルを入れるようにしている。しゃぶしゃぶのおつゆ絵の具は、碗のような器に絵の具を出し、ジェルと水をたっぷり入れ、色のおつゆを作って画面に筆で描く、画面に流す。おつゆ絵の具は流れたり、滲んだり、濡れた絵の具と混ざって泣いたり、となかなか厄介なところもあるが、思わぬ拾い物、偶然にうまく事が運ぶことがある。

「いつまでもかじりついては いけない やめどき 筆の 置きどころが 肝心」と常々肝に銘じているのだが、「もうすこし もうちょっと」となんだかんだ引きずってしまって、それこそ「あとのまつりだ」という情けないことになってしまう。「オレの資質だ どうにもならない」ではいけないのだ。

安威川の土手を走っている、先日まで走っていたあたりが浚渫工事で通行禁止、少ししもの下水処理場の門に自転車をおいて、土手の外を下流に向かい、中央市場あたりから土手の上へ乗り、なんて恰好のコースを見つけ毎日ご機嫌に走っている。10月も下旬になるとあの夏のくそ暑い状態もほとんどなくなり、ここに来る自転車でも上着をはおるようになってきた。夏のあの時期、体力がない、疲れる、「オレは ひょっとして 病気になっているのかな」と危ぶむぐらいにしんどかった。毛布が要る、布団が要る、そんな寒さがやってきて、このところ体力も出てきて何となく元気になってきた。ひとこと寒さがやってきての頻尿の話。河原にいる1時間半の間に5回ぐらい小便がしたくなることもある。これはみっともない、みっともないが我慢ができない、ちょっと草むらで、ちょっとかげで、小便をしているが、「カエルもミミズもみなゴメン」である。山登りも、二本目三本目から急に脱力症状が出てきた。自分の体力を過信してはいけないと思うが、これが加齢によるものか、夏の暑さによるものか、いずれにしても徐々に弱っていつている。

また台風が来ているとか、どうも天候が不順な秋の日の今日この頃の風景だ。今年の台風は日本列島の北のほうに行く傾向があるらしい。例年台風は、九州四国あたりに被害をもたらす、TVの中継も名前の知った地名が多く出ていたが、距離の離れた北のほうになると、「何県の町 名前は知っている川だけれど どこを流れてい流川かな」なんて頓珍漢な話になってしまう。

走っている横に、大きな建造物か工事中。日々進行していくさまが楽しみだけれど、この技術の時代、コンピューターの時代、土木建築の仕事、まだまだ手仕事が多いようで、一年ぐらいはかかるのかな。



今回の話は、表題に、「比良」と入れながらも、ほんとうに行った山は、「峰床」である。坊村から出発、鎌倉山を経て、峰床山から葛川小学校に帰る道は増水やら崖崩れやらが起こっているかもしれないので、峰床の池を反時計回りして、ピストンで坊村に帰ろうと頭の中で計画した。失敗は地図を持っていなかったこと、帰り道でちょっと寄り道したこと、山の中で2時間くらい迷い上り下りの連続、それこそきつい上り下りで道を探した。迷いながら、「ここは来た 覚えてる この木 見た覚えがある」「おかしい おかしい」の連発、時計を見つつ、「山の中での 一晩は 嫌だ そんな 恐ろしい」という一念。「元に オグロ峠に 戻ろう」と引返し、「5時前には暗くなる それまでに 山を下りたい」ということで、標識に出ている、「久多 3.8K」を選びめざした。帰ってみれば 大笑いの、楽しかった山中彷徨の一日でした。

◎6:30 家を出発、6:50 正子さん宅を出発、7:00 茨木 IC から坊村駐車場に8時に着いた。どこにも渋滞がなく車はすいすい走れた。今回はイン谷口から武奈ヶ岳の予定だったが、車を走らせながら、「どうせ行くなら 鎌倉山・峰床山に行ってみたい よろしいでしょうか」と同道の正子さんにうかがいをたてた。

◎天気は快晴だ、30分ほど歩くと汗が出てきた。まだ8時過ぎだというのに足元にはオレ自身の影が動き、樹木も草もキラキラ、晩秋とはいえ陽が照ると暖かい、もくもくとえっちらおっちらである。

◎すぐに林道を横切る。林道といっても石ゴロゴロの未舗装、四輪駆動のトラックが材木を運ぶぐらいの道かな。毛糸も帽子・手袋・ダウンジャケットはザックに入っているが、汗拭きタオルを忘れてきた。

◎「あれ なんの 巣」見上げればでっかいモミの樹の上のほう、頑丈そうな枝に鳥の巣のようだがでかい、人が丸まって寝られるぐらいの大きさ、しかも三つもある。「あれは 熊さんの 巣じゃないかな 熊が家族で 寝たのかな 親子熊のベッドかな」

◎1時間ぐらいで、「ブナ平」という標識がある開けた所。武奈ヶ岳は後ろの方向、なんでブナの標識が下にあったかと思っていたが、この場所のことだったかと納得。

◎2時間で鎌倉山の標識。ここまでは穏やかな登りが続いた、天気も穏やか、雲がちょっとしかない青空、「ああ素晴らしい」と感嘆の声。「オレ 体力が戻ってきたのかな バテタ 疲れた しんどい」といういやあな感じが今日はやってこない。朝晩の涼しさがいいのか、睡眠がいいのか、うれしいことだ。

◎鎌倉山から先はどんどん下りだ、どこまで下りるのかという頃にやっと上り返す。前方に見えるぼこりんが目的の山だろうと思われるが鞍部が深く、いくつかの上り下りがありそう。一二年前に来ている、何となく思い出してきた。鎌倉山まではついていた赤い道しるべが無くなり、干からびたテープや布が目をごらさなければわからないという赤い道しるべがかすかにある。ずるずる滑る急斜面、「これは道かな 人の歩いた跡かな」というようなところを進んで行くが、尾根道を歩けば正解のようである。

◎12時前に峰床山のとっぺんにやってきた。快晴の空模様、真っ青の空、ちょっとだけ白い雲が、見渡せば山また山、ここは京都市かな、登り口は滋賀県だった。「日の暮れるのが早いので 弁当はすばやく済ませて 12:15には出発しましょう」草の上に座って弁当を食べた。まつたけおにぎり、卵焼きをいただいた、ぺろりと食っていざ出発。反時計回りに池を巡ろうと下る。水が流れる谷筋で蛇を見た。70センチぐらい、白っぽい黄土色、頭もすんなりしている、図鑑を見てもわからない、気温が低くなりかける今は動きも鈍い。

◎このあと 10 分ぐらいで今度はシマヘビに出くわした。同じぐらいの大きさ、池や湿原のところには、カエルや蛇が多いようだ。お二人さんには、棒でつついて向こうに行ってもらった。

◎「二十歳のころ この辺りには よく来た」という夫婦に会った。今回の山中で会ったのは彼らだけだった。葛川小学校のある中村から登ってきたようだ。「道は 通れますしたか」「増水で渡渉がむつかしい」「ここらあたりは 昔は 池にも 湿原にも 入れた」「ただ 靴が 汚れるだけ」山慣れたベテランだ。

◎峰床・久多・八丁と書かれた、オグロ峠、ここで素直に上に登ればいいものを横の歩きやすい道に入ってしまったのが、まず最初の失敗。「あ～あ～ 30 分もアルバイトしてしまった」と軽く考え斜面をよじ登って、これで登山道だろうというところを進みだした。この時にオグロ峠標識のある所に戻るべきだった、いたく反省、また反省の行動だった。「やれちがう これはおかしい ここは来たところだ」うろろうして元のオグロ峠に戻ってきた。「時間も時間 決断の時 久多に降りるよ」

◎久多がどこかわからないけれど、「遠敷峠へ行く道か 広河原に行く道か いずれにしても 道路に出れば最悪 2 時間も歩けば 坊村までそう遠くは ないはず 車にたどり着けるだろう」と思っていた。ゆったりした下りが続いていた、このままゆったりが続いてくれと願っていた、しばらく下ると道が先細り、しりもちをつきながら、下に谷が見え水が流れる。渓谷に近づかなければいいかと危ぶんでいたが 谷筋の渓谷道、滑って転べば危険な場所、そんな所を 30 分が過ぎて向こう側に斜めの線、川沿いに車の通れるようなような道が続いている。「あれは道だ 林道だ やったね」と小躍りした。あそこに登ればまずは安心、石を踏んで川を渡り斜度のきついズルズル斜面を這い上がった。時間は 4 時、廃道に近い道とはいえ、林道に乗ればまずはひと安心だ。「いやあ えらいめにあった IC レコーダーを使う気にも カメラを写す気にもならなかった」林道に上がってやっと録音である。「いい歳して こんな 山行はよくない 地図を持たなきゃ」またまた大反省。

◎4:30 人家が出てきた、畑がある、向こうにガードレールが見える、「やれやれ 次は道の確認 時間はどれぐらいかかるだろう」馬小屋があつて人がいた。「この道をまっすぐ行けば 梅の木に できるよ」「え 歩いて そらあ 1 時間半 2 時間 かかるよ」「それより そこに駐在がある パトカーで 送ってもらったら」気軽にそんなことをおしゃるが、駐在さんにそんなことは頼めない、水を飲み、バナナとパンを食った。

◎「タクシーを呼ぼう」なんて希望を捨て、車道をてくてく歩き始めた。5 時過ぎに暗くなりだし、ヘッドランプを付けた。ほとんど車も通らない。道端の標識に、広河原や大原の文字が見える、ここは京都市だ。梅の木から何度か通ったことがある道だ。まさか車で走った道を、てくてく歩くととはと苦笑。

◎道路が二俣に分かれている、真っすぐが梅の木、左が朽木と書いてある、遠敷峠に行く道のような。進むとキャンプ場があった、このバンガローに泊まったことがある、梅の木までもうすぐだ。

◎車が後ろからやってきた、細い道、ライトを向けて通過を待ったが車が止まりドアが開いた。「乗りますか」「え 梅の木から坊村に行くのですが」「梅の木から朽木方面に行くが 梅の木までまだ距離があるよ」というので乗せてもらった。「これは市バスだ」と前の値段表を見て分かった、220 円と書いてある、親切で乗せてもらったと思い込んでいたが、客だと思って拾われたようである。220 円を払って、またもや坊村の駐車場まで歩き始めた。真っ暗の中、車にたどり着いたのが 6 時、10 時間の行動、それでもなかなか楽しい山でした。家に降り着いたのが 8 時半を過ぎていた。